

# 教育研究業績書

2017年05月29日

所属：心理・人間関係学科

資格：教授

氏名：茅野 宏明

研究分野	研究内容のキーワード
応用健康科学, リハビリテーション科学, 福祉工学	セラピューティックレクリエーション, レジャー, 社会参加, リハビリテーション
学位	最終学歴
Master of Science in Education (修士、教育学), 体育学士	南イリノイ大学カーボンデール校大学院 教育学研究科 レクリエーション専攻 修士課程 修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 教育方法の実践例</b>		
1. 特色ある地域連携と学生の主体的参加型授業	2013年12月～現在	地方公共団体の事業を実施するNPO法人と連携し、「防災ウォークラリー」を実施。学生がNPOスタッフとともに企画運営し、大学近隣の住民（老若男女）を対象に、ウォークラリーを通して、防災の意識を高めたり、避難場所を覚える機会を提供している。本企画には大学も協力している。
2. 学生との協働型授業の展開	2010年～現在	キーワードや写真、イラストなどのスライド題材を学生に投げかけ、各授業の方向性を導く協働型の授業を展開。ワイヤレスプレゼンターを使用し、机間巡視をする。
3. 特色ある地域連携と学生の主体的参加型授業	2009年4月～現在	知的障がい者施設と連携し、スポーツや文化活動を介した交流会を実施。学生が企画運営するプログラムに、利用者が希望するプログラムに参加するという地域連携を実践。
4. 特色ある地域連携と学生の主体的参加型授業	2009年4月～現在	精神障がい者施設と連携し、スポーツを介した交流会を実施。卓球を通じた「スポーツ交流会」では、利用者と学生が互いに無心になって卓球に打ち込む機会もあり、学生が利用者からいろいろな話を聞くなど、進め方は学生に任せている。その他に、施設代表者から利用者の特徴を聞き、学生からの様々な質問について、答えてもらう機会も持ち、スポーツの可能性や利用者理解を深めている。
5. 特色ある地域連携と学生の主体的参加型授業	2003年12月～現在	地方公共団体と連携し、「わいわいこどもフェスティバル」にて武庫川女子大学コーナーを設け、学生が子ども向けの遊びコーナーを企画運営する実践的な授業を展開。年1回12月頃実施。それに向けて、授業の中で準備、リハーサルを実施。
<b>2 作成した教科書、教材</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
<b>1 資格、免許</b>		
1. 余暇開発士	2009年04月～現在	公益財団法人日本レクリエーション協会、A39486号
2. 福祉レクリエーション・ワーカー	1996年05月～現在	公益財団法人日本レクリエーション協会、A39486号
3. 公認上級障がい者スポーツ指導員	1987年02月01日～現在	公益財団法人日本障がい者スポーツ協会、第SA19号
4. 中学校教諭 一級普通免許状（保健体育）	1980年03月31日～現在	昭55中1普、第1519号
5. 高等学校教諭 二級普通免許状（保健体育）	1980年03月31日～現在	昭55高2普、第1509号
<b>2 特許等</b>		
<b>3 実務の経験を有する者についての特記事項</b>		
<b>4 その他</b>		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
1. 楽しさの追求を支える理論と支援の方法	共	2013年2月1日	公益財団法人 日本レクリエーション協会	第1節ではAPIEプロセスを概説。循環性を重視したプロセスの重要性を指摘。第2節では、TRサービスモデルの代表的な2モデルを概説。支援する現場において

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
2. 楽しさの追求を支えるための介入技術	共	2013年02月01日	公益財団法人 日本レクリエーション協会	適切なサービスモデルを選択できるようなポイントを紹介。また、説明責任が問われる昨今に対応できる総合的なサービスモデルの重要性も指摘。吉岡尚美、マーレー寛子、小池和幸、 <u>茅野宏明</u> 、秦野吉徳、小久保信幸（分担：第2章第1節個人支援の手順pp. 40-45, 第2節総合的な支援の流れpp. 46-55）
3. 日本レジャー・レクリエーション学会の歩み（その2）	共	2010年11月27日	日本レジャー・レクリエーション学会	生きがい活動や余暇自立促進の方法について概説し、支援の基本的な考え方を、APIEプロセス及びTRサービスモデルを示しながら概説。また実際の社会資源の活用法や教育連携の可能性も示唆。小池和幸、高崎義輝、南條正人、小久保信幸、 <u>茅野宏明</u> 、池良弘（分担：第3章第1節pp. 72-77）
4. レクリエーション活動援助法（三訂版）	共	2007年02月20日	ミネルヴァ書房	「レジャー・レクリエーションの研究をめぐる動向と将来展望」について、「意識と行動」に関する過去の研究をレビューした。質問紙法による研究方法が最も多く、行動や意識の分析につながっていた。既存尺度やエビデンスベースとともに、哲学的研究も必要とされた。麻生恵、小田切毅一、佐橋由美、 <u>茅野宏明</u> 、高橋伸ほか（分担：pp. 173-181）
5. 障害者福祉論（第5版）	共	2007年01月20日	中央法規出版	第3章では、治療的意味あいを持つレクリエーション活動援助とセラピューティックレクリエーション・サービスモデルの紹介。第8章では、訪問介護におけるレクリエーション活動援助の役立て方と評価法。資料としては、活動分析による治療的意味あいの分析方法の実際。石光和雅、垣内芳子、金子恵子、小池和幸、齊藤次男、坂本宗久、角田良子、田中満枝、 <u>茅野宏明</u> 、生田目昭彦、増淵晴美、松尾純子、吉田圭一、良田麗明（分担：第3章pp. 26-47, 第8章pp. 110-119, 資料pp. 196-204）
6. 障害者福祉論（第4版）	共	2006年01月	中央法規出版	障害者に提供するスポーツやレクリエーション活動の際に、注意する援助方法を提示。特に、利用者の自立生活に向けた介入の程度について、留意しながら支援していくことが重要であることを図解。植村英晴、内田教子、小澤温、落合俊郎、木原清、小池将文、坂本洋一、佐藤久夫、関宏之、高畑隆、田中信行、 <u>茅野宏明</u> 、野村欽、松兼功、宮川親興、八木澤智之（分担：第5章第8節、pp. 224-231）
7. 障害者福祉論（第3版）	共	2005年02月	中央法規出版	スポーツとレクリエーションの意味と関係を考察し、その後、身近な取り組みを紹介しながら、障害者スポーツの大会や指導者養成も紹介。介護業務の一つとして活用するための、知識と援助技術を紹介。また、セラピューティックレクリエーション・サービスモデルを参考にした理論づけも試みた。植村英晴、内田教子、岡田喜篤、小澤温、落合俊郎、木原清、小池将文、坂本洋一、佐藤久夫、関宏之、高畑隆、田中信行、 <u>茅野宏明</u> 、野村欽、長谷部哲、松兼功、三ツ木任一、宮川親興
8. レクリエーション活動援助法改訂	共	2005年02月	ミネルヴァ書房	スポーツとレクリエーションの意味と関係を考察し、その後、身近な取り組みを紹介しながら、介護業務の一つとして活用するための、知識と援助技術を紹介する。また、セラピューティックレクリエーション・サービスモデルを参考にした理論づけも試みた。植村英晴、内田教子、岡田喜篤、小澤温、落合俊郎、木原清、小池将文、坂本洋一、佐藤久夫、関宏之、高畑隆、田中信行、 <u>茅野宏明</u> 、西田紫郎、野村欽、松兼功、三ツ木任一、宮川親興
9. 障害者のスポーツ指導の手引（第2次改訂版）	共	2004年2月10日	ぎょうせい	3章では、治療的意味あいを持つレクリエーション活動援助とセラピューティックレクリエーション・サービスモデルの紹介。8章では、訪問介護におけるレクリエーション活動援助の役立て方と評価法。資料としては、活動分析による治療的意味あいの分析方法の実際。石光和雅、垣内芳子、金子恵子、小池和幸、齊藤次男、坂本宗久、角田良子、田中満枝、 <u>茅野宏明</u> 、生田目昭彦、増淵晴美、松尾純子、吉田圭一、良田麗明
				レクリエーションの定義とレクリエーションとレクリエーション活動の差別化という基礎理論をもとに、障害者スポーツの指導に役立つセラピューティックレクリエーションサービスを紹介。特にサービスモデルとして、①余暇活用能力モデル、②健康維持・健康増進モデルを取り上げた。スポーツプログラムの目的に応じて、これら2つのモデルを使い分けることが可能。河野康徳・矢部京之助・ <u>茅野宏明</u> ・陶山哲夫・築島謙次・李俊哉・田内光・佐久間肇・安江末雄・菊本弘次・奥田邦晴・藤原進一郎・後藤邦夫・大久保衛・初山泰弘・二瓶隆一・鷹野昭士・山本行文・吉村龍彦・中森邦男・高橋寛・小林智志・三村一郎・加藤博志・若山浩彦・田嶋恭江・吉田寿子・金田安正・小西治子（分担：第1編第2章2, pp. 31

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
10. アダプテッド・スポーツの科学	共	2004年10月28日	市村出版	-39) 高齢者へのレクリエーション活動援助とアダプテッド・スポーツの関係を紹介。レクリエーション活動の意義をはじめ、援助プロセスや援助計画、実践へのつなぎと実践評価方法を紹介。矢部京之助、草野勝彦、中田英雄、綿祐二、茅野宏明、他62名（綿・茅野共担：pp76-81）
11. 障害者福祉論（第2版）	共	2003年02月	中央法規出版	スポーツとレクリエーション活動を、用語の定義や意義から基本的に理解する。また、身近で行われている取組みを紹介し、特にスポーツをする目的の変化について解説した。そして、セラピューティックレクリエーション・サービスの概要と取組みを紹介。介護職がどのようにスポーツやレクリエーション活動に関わることが望ましいのかについても提言した。スポーツやレクリエーション活動で楽しさや充実感の体験が不可欠である。植村英晴・内田教子・岡田喜篤・小澤温・落合克彦・落合俊郎・木原清・小池将文・坂本洋一・佐藤久夫・関宏之・高畑隆・田中信行・茅野宏明・野村勲・松兼功・三ツ木任一・宮川親興（分担：pp. 207-214）
12. レクリエーション活動援助法	共	2001年05月	ミネルヴァ書房	第3章では、治療的意味あいを含めたレクリエーション活動とその方向づけについて、最近発表されたセラピューティックレクリエーションサービスモデルの4つを紹介しながら、日本での応用のポイントを提示。資料では、実際に取り組んでいるさまざまなレクリエーション活動（レクリエーション財）を分類別に紹介し、また活動分析方法も提示。最後に、国家試験の過去問題と解答を解説した。石光和雅・垣内芳子・金子恵子・小池和幸・斎藤次男・坂本宗久・角田良子・田中満枝・茅野宏明・生田目昭彦・増淵晴美・松尾純子・吉田圭一・良田麗明（分担：第3章pp. 26-46、資料pp. 195-217）
13. 障害者のスポーツ指導の手引	共	2000年09月	ぎょうせい	レクリエーションの定義とレクリエーションとレクリエーション活動の差別化という基礎理論をもとに、障害者スポーツの指導に役立つセラピューティックレクリエーションサービスを紹介。特にサービスモデルとして、①余暇活用能力モデル、②健康維持・健康増進モデルを取り上げた。スポーツプログラムの目的に応じて、これら2つのモデルを使い分けることが可能。河野康徳・矢部京之助・茅野宏明・陶山哲夫・築島謙次・李俊哉・田内光・佐久間肇・安江末雄・菊本弘次・奥田邦晴・藤原進一郎・後藤邦夫・大久保衛・初山泰弘・二瓶隆一・鷹野昭士・山本行文・吉村龍彦・中森邦男・高橋寛・小林智志・三村一郎・加藤博志・若山浩彦・田嶋恭江・吉田寿子・金田安正・小西治子（分担：pp. 29~36）
14. 福祉レクリエーション援助の方法	共	2000年04月	中央法規出版	個別レクリエーション援助のための具体的援助法を紹介。まずレジャーカウンセリングの歴史の変遷を振り返り、余暇生活援助の基礎を理解。実際に用いられている余暇生活援助技術（余暇教育プログラムとコミュニケーションボード）を提示。千葉和夫・小池和幸・茅野宏明・久保誠治・木原孝久・小泉勇治郎・石田易司・妹尾弘幸・藪田碩哉・浮田千枝子（分担：pp. 37-64）
15. 臨床ソーシャルワーク論	共	1997年11月27日	中央法規出版	技術編では、レクリエーションに関する基本的概念から、レクリエーション療法の基本的な考え方を解説。特に、レクリエーション療法の基盤となるセラピューティックレクリエーションの考え方とそのサービス体系（TRAM体系）を理解することに重点をおく。実践編では、TRAM体系を中心に訓練過程や余暇教育過程における事例を提示し、レクリエーション療法を効果的に活用する手法を具体的に示し理解を深めている。小関康之・西尾祐吾・倉石哲也・佐々田縫子・白石大介・田中陽子・玉木晶子・茅野宏明・中田真槻・得津慎子・村上信・米田綾子（分担：第Ⅱ部技術編pp. 110-118、第Ⅲ部実践編pp. 169-175）
16. 身体障害者のスポーツ指導の手引き	共	1997年10月1日	ぎょうせい	レクリエーション概論として、レクリエーションの意味（建設的な感情）やレジャーや余暇などの関連用語を解説。また、身体障害者のレクリエーション援助としてセラピューティックレクリエーション・サービスを解説。3つの過程からなるサービスを普遍的なものと理解した上で、各援助者の環境や立場からは、どのような援助目標を創りあげられるのかという創作が必要とされている。藤原進一郎・初山泰弘・矢部京之助・陶山哲夫・梁島謙次・田内光・奥田邦晴・河野康徳・鷹野昭士・茅野宏明・高橋まゆみ・大久保衛・山本行文・吉村龍彦・中森邦男・高橋寛・小林智光・三村一郎・加藤博志・上原国昭・金田安正（分担：第3編第1章pp. 129-134）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>1 著書</b>				
17. レクリエーション指導法（第2版）	共	1997年04月10日	ミネルヴァ書房	治療的レクリエーションの考え方とその方向づけを解説。特にセラピューティックレクリエーションとその3過程が連続したレクリエーション援助が重要である。最終的にはレクリエーション的自立に向けた援助が必要で、そのためにグループ援助や個人援助を活用する。また、ホームヘルパーの活動から個人的レクリエーション援助の考え方や工夫点を提示している。石光和雅・垣内芳子・小池和幸・斎藤次男・坂本宗久・角田良子・田中満枝・茅野宏明・生田目昭彦・野沢恵子・増渕晴美・吉田圭一・良田麗明（分担：第3章pp. 25-37, 第7章pp. 85-95, 資料pp. 169-182）
18. 長寿社会のトータルケア	共	1993年12月25日	第一法規	トータルケアにおけるレクリエーション援助の意義を3つの生活行動と老人福祉施策との比較から考察し、解説した。施設スタッフのレクリエーション援助に対する認識を、開放モデル、身体モデル、精神モデル、交流モデル、活性モデルの視点から、これからのレクリエーション援助の方向性を示した。佐藤智、古瀬徹、足立紀子、茅野宏明、他12名（分担：第10章pp. 149-158）
19. レクリエーション・カウンセリングの理論と実践	共	1993年03月	日本障害者リハビリテーション協会	セラピューティック・レクリエーションの理論やレクリエーション・カウンセリングを含めたセラピューティック・レクリエーションの援助方法を明解に解説した。特に、コミュニケーション・ボードはレクリエーション・カウンセリングを進める上で、重要な援助法であることを、ピア・カウンセラーの立場から検証した。茅野宏明、千葉和夫、綿祐二、小池和幸、勝矢光信（分担：pp. 1-5）
20. 障害者とレクリエーション	共	1993年02月10日	日本障害者リハビリテーション協会	日本障害者リハビリテーション協会が毎月発行している「戸山サンライズ情報」の中から、レクリエーションに関するトピックを80項目選出した。障害者のレクリエーション的自立への導きをするにあたり、多種多様に可能性が秘めていることを広く啓蒙することを目的とした。菌田碩哉、小池和幸、小林昭三、茅野宏明、千葉和夫（小池と茅野の共担：pp. 49-229）
21. 改訂介護福祉士養成講座⑥「レクリエーション指導法」	共	1991年12月10日	中央法規出版	障害を持つ人々や社会的に束縛されている人々に対して、レクリエーションの目的を達成させるためのサービスの効果をよりの確に示すための新しいアプローチ方法を提案する。基礎的観点を理解した上で、サービスの目的・要素を探索する必要がある。同時に、行動目標を発展させることも大切である。石原、大場、垣内、金田、木谷、志賀、菌田、田中、茅野、千葉、阿亜、三木（分担：pp. 155-166）
22. 効果的なレクリエーション・プログラムの進め方	共	1991年03月31日	全国身体障害者総合福祉センター	障害者のレクリエーション指導の実施に際して、参加者のニーズ、身体状況の把握、イベントの企画、進行管理、そして実施結果の効果測定等の手法などが効果的に活用できるような指導書。多くの障害者の施設やレクリエーション指導者との研究会からの蓄積を具体的に示している。小池和幸、茅野宏明、千葉和夫（分担：pp. 4-7, 16-37, 86-95）
23. レクリエーション指導法	共	1990年12月20日	ミネルヴァ書房	レクリエーションと社会福祉との接点から効果的で実用性の高い行動目標の設定を考察する。また、セラピューティックレクリエーションサービスを日本の社会福祉制度の中でどのように活用するか、その方法論や実践の場をまとめている。ホームヘルプ活動を分析し、その中から個人に対応するレクリエーションプログラムの計画・実施・評価について考察した。石光和雅・垣内芳子・小池和幸・斎藤次男・坂本宗久・角田良子・田中満枝・茅野宏明・生田目昭彦・増渕晴美・吉田圭一・良田麗明（分担：pp. 25-37, 84-94, 167-180）
<b>2 学位論文</b>				
1. The effects of a commercially produced audio-visual electronic game of perceptual learning skills of mildly and moderately retarded adults (修士論文)	単	1984年5月	Southern Illinois University at Carbondale Graduate School (Master's degree)	市販されている視聴覚ゲームをすることによって、軽度中度精神遅滞者の認知力が向上することの可能性を実験的手法によって解明しようとしたものである。直接的な影響力は統計的には見られなかったが、プラスの方向への変化がみられた。また、市販されているゲームを少し改造するだけで、精神遅滞者も楽しむことができることが明らかになった。今後、ゲームで養われた機能がどのようにして一般化できるのかが新たな課題としてあげられた。（pp. 1-214）
<b>3 学術論文</b>				
1. Therapeutic Recreation in Modern Japan: Era of Challenge and Opportunity	共	2007年06月	Therapeutic Recreation Journal, 40(2)	Leisure Education Program based on TR principles, noting how the program was adapted to suit Japanese culture. The article also describes th

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
2. 内的余暇動機スケールと余暇退屈度スケールの解釈シートの実践開発	単	2005年12月	レジャー・レクリエーション研究 第55号	e socio-cultural contexts in which TR has developed in Japan. Hitoshi Jin Nishino, Hiroaki Chino, Naomi Yoshioka, and Joseph Gabriella. pp. 123-126.
3. セラピューティックレクリエーション・サービスモデル (AGLモデル) の適応性	単	2003年11月	レジャー・レクリエーション研究 51号	ILMとLBSの解釈を導きやすい解釈シートを実践的に開発することである。解釈にバイアスがつかないようにし、Excelで使用できるように開発を試みた。因子分析による負荷量を見直した結果を解釈シートに反映する必要性が指摘された。さらにアセスメント未経験者でも、経験者と同等の結果を導けるように検証することが今後の課題といえる。(pp. 36-39)
4. 老人ホームにおけるセラピューティックレクリエーションサービスの整備に関する一考察	単	2002年11月	レジャー・レクリエーション研究 49号	アリストテレスの幸福モデルは、最高善 (eudaimonia) を目指し、人間の徳 (中庸) こそが大切と唱える。他方、究極は自由時間の遊びではない。AGLモデルは、ディーサーによると異文化的偏りは少なく、ユニバーサル的なモデルと言われている。本モデルを3つのケースにあてはめて考察すると、中庸の大切さが感じられる。人間の生き方に関するテーマに適したモデルと考えられる。(pp. 42-45)
5. セラピューティックレクリエーションサービスモデルの実践に関する研究 (1)	単	2001年11月	レジャー・レクリエーション研究 46号	TRサービスを発展するにあたり、日本では困難な環境にあることから、介護福祉士とともに取組むことを一つの方法として提案した。TRサービスモデルに既存のレクリエーション活動をあてはめることによって、現在の援助をTR的に変更することが可能である。最終的には、サービスの量よりもサービスの質 (連続性) を確保することにある。(pp. 66-69)
6. 余暇教育プログラム参加者の余暇意識の変化	単	1999年11月	レジャー・レクリエーション研究 41号	社会福祉制度とレクリエーションサービスの接点から、セラピューティックレクリエーションサービスの展開を探り、日本における実践に役立つアセスメントシートや計画シートを開発。A Pシートの開発結果を具体的に提示し、セラピューティックレクリエーションサービスモデルとの整合性と限界性も指摘。現在は老人病院での使用を前提としているが、様々な領域での活用を促進し、その結果をフィードバックし、さらに発展させたい。(pp. 17-20)
7. 海外における障害者スポーツの実態調査 (オーストラリア・ニュージーランド)	共	1999年03月	社会福祉・医療事業団	自立生活訓練センターにおける7名のケースを事例的に調査研究した。決断力をもつ身体的障害をもつ人々には、自立生活訓練に適したプログラムの1つであると考えられる。特に、自己決断・自己選択・社会参加という3点が含まれる本プログラムは、様々な施設でも試みたい。(pp. 34-37)
8. 余暇生活設計のツール開発に関する研究 (2)	共	1997年03月31日	自由時間研究 第21号	社会福祉事業の先進国であるオセアニアのニュージーランドとオーストラリアにおける障害者スポーツの取り組みについて調査した。両国とも徹底したメインストリーミングを地域や学校に取り入れている実態が明らかになった。楽しみレベルのスポーツからパラリンピック選手育成まで、段階的に民間団体や行政が臨機応変に対応している様子が見られた。今後は、インクルージョンへの取り組みを徹底したいと述べていた。茅野宏明, 高橋明 (分担: pp. 2-41)
9. 余暇生活設計のツール開発に関する研究	共	1996年03月31日	自由時間研究 第19号	平成8年度 (財) 日本レクリエーション協会L&R総合研究所助成研究として行われた。余暇における内発的動機づけに関する研究が近年アメリカにて集中して発表されていることに基づき、また、前年度の研究課題を解決しながら、ILMの日本語版を作成した。内発的な余暇の動機づけの一元的理解に信頼性と妥当性が見られた。また、余暇退屈度との反比例の関係も明らかになった。佐橋由美, 茅野宏明, 野村一路 (共同研究につき担当部分抽出不可能, pp. 40-49)
10. 余暇生活診断のツール開発に関する研究	共	1995年03月31日	自由時間研究 第17号	インテイク時のアセスメントツール開発と潜在的余暇欲求開発マニュアルの2つのサブテーマから構成されている。前者では、LDB、LBS、LSSを中心にまとめられたツールの信頼性の検証が行われた。後者では、余暇欲求をビジョンとして創造する過程を援助する具体的手法の試案作成が行われた。茅野宏明, 野村一路, 佐橋由美, 錦祐二, 坂野, 辰巳, 浮田千枝子 (茅野・野村・佐橋の共同研究につき担当部分の抽出不可能: pp. 11-18)
				夫妻に対する余暇生活開発援助過程の事例研究を通して、ワークシートなどの有効性や余暇生活開発援助の今後の方向性を検証することを目的とした。余暇欲求のワークシートの二元的分析の必要性やワークシートのみからの余暇診断の危険性が明らかにされた。また、夫妻のお互いの理解を高めることにつながり、お互いのプライバシーを大切にすることの重要性についても理解することができた。茅野宏明, 中澤繁男, 平岡貴子 (共同研究につき担当部分抽出不可

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
11. 身体障害者関連施設職員によるレクリエーション活動の価値観の分析	共	1994年3月31日	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編）第41巻	可能：pp. 31-50) 平成4年度文部省科学研究費助成研究（奨励研究）の一部として実施。身体障害者関連施設職員がレクリエーションプログラムをどのように認識しているかを明らかにした。趣味開発的な視点が強い反面、余暇相談的視点が弱い。また個別援助が必要と、9割以上の職員が認識している。（共同研究につき担当部分抽出不可能：pp. 79-86）
12. スポーツ活動への動機づけに関する一考察	単	1994年08月	日本障害者体育・スポーツ研究会研究紀要 18号	身体障害者が自立した余暇生活を営むのに必要な要素として、人との出会い、活動との出会い、そして用具との出会いがあげられる。そこでコミュニケーションボードによるスポーツ活動への動機づけの可能性と今後の課題を考察した。気軽に情報を提供できる一方で、その情報を収集し、分類することが重要なポイントになる。また、視覚障害者への対処について、一考する余地がある。全（pp. 65-68）
13. 「余暇生活診断テスト」（LDB）日本語オリジナル版作成に関する研究	共	1994年03月31日	自由時間研究 第15号	LDBのワークシートの再検討と改訂されたワークシートの予備調査を行い、LDB日本語オリジナル版の妥当性と信頼性を高めることを目的とした。LDBオリジナルに代わって使用できる日本語版のワークシートの完成には至らなかったが、ショートフォームバージョンについては、良好な傾向が得られた。LDBだけでなく、数多くある余暇能力を査定するワークシートにも目を向け、余暇開発のためのツール開発を進めていく必要がある。野村、茅野、清水、西原、浮田、西（共同研究につき担当部分抽出不可能：pp. 102-108）
14. レクリエーション・カウンセリングの事例研究	共	1994年03月	全国身体障害者総合福祉センター	レクリエーション活動を得ることで、身体障害者の自立や社会参加に効果的な影響を及ぼしているが、いまだに具体的な援助方法が明らかにされていない。本研究では、リハビリテーションサービスの事例から、レクリエーション・カウンセリング的要素を抽出し、今後の体系化への糸口を見つけることを目的とした。就業中心の自立目標の転換と障害者が実際に手にとって読めたり、見たりすることのできる事例集やグラビアの大切さを感じとることができた。茅野宏明、小池和幸、綿祐二、勝矢光信（共同研究につき担当部分抽出不可能：pp. 1-95）
15. セラピューティック・レクリエーション-高齢者におけるアクティビティサービスの展開-	単	1993年02月	総合ケア3（2）、医歯薬出版	レクリエーションやセラピューティック・レクリエーションの基礎知識を解説した。そして、高齢者ケアへの応用として、先行研究での報告などを交え、個人活動と集団活動を同時に導入する方法や個人への適切な余暇情報が提供できる環境整備の方法を具体的に提示した。（pp. 32-37）
16. 社会福祉におけるレクリエーション・カウンセリング方法の研究	共	1992年03月	障害者の社会参加への支援マニュアル作成普及事業研究会（財）日本障害者リハビリテーション協会	障害者の自立や社会参加の支援方法としてレクリエーション援助を積極的に活用する方法を調査研究した。障害者に直接ヒアリングを実施し、ケーススタディを通じ、社会福祉におけるレクリエーション・カウンセリングの実態とその方法の体系化を試みた。障害者の自立や社会参加にレクリエーションが効果的な影響を与えていることが明らかになった反面、障害者に対する支援方法や技術がまだ十分に開発されていない面が浮き彫りにされた。茅野宏明、千葉和夫、小池和幸、綿祐二、小林昭三、後藤（分担：pp. 2-29）
17. デイサービスにおけるレクリエーションを取り巻く諸理論	単	1991年03月	社会福祉とレクリエーションの課題1990年度、日本レクリエーション協会-レジャー・レクリエーション研究所	セラピューティックレクリエーションの基本的理解をサービスの段階を提示しながら記している。また、セラピューティックレクリエーションに関する最新情報として、自立と甘えについて考察し、日本の風土に適應するためのセラピューティックレクリエーションサービスの工夫を提示している。（pp. 17-20）
18. わが国におけるセラピューティックレクリエーションの現状と今後の展開への提言	単	1990年08月	自由時間研究、（8）、レジャー・レクリエーション研究所	セラピューティック・レクリエーションの日米比較から考察を加えた。わが国におけるセラピューティック・レクリエーションを発展させるには、レクリエーションの定義の明確化と現行の指導者資格制度の再考が必要である。ゲーム・ダンス・ソングという検定種目をレクリエーション・ワーカーの資格認定科目からはずし、意図的なアセスメントとプログラム計画に重点を置いた資格制度への改革が必要になってくると考えられる。（pp. 27-35）
19. 実験的手法におけるデータ解析の応用に関する一考察	単	1989年09月	レクリエーション研究、（20）、日本レクリエーション学会	セラピューティック・レクリエーション・サービスの向上にあたって、科学的な裏付けの必要性が求められている。データを科学的に分析していない研究を、手軽にデータ解析のできるU検定により、客観性の高い結果を得ることができた。また、データ未解析の結果と比較すると、かなり異なった結果と考察が得られた。（pp. 1-7）

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>3 学術論文</b>				
20. セラピューティックレクリエーションに関する研究の傾向と今後の課題	単	1988年03月	武庫川女子大学紀要－教育学科編、(35)、武庫川女子大学	レクリエーション学会におけるセラピューティックレクリエーションに関する研究領域を分析し、その傾向から今後の課題を探った。プログラムの開発面に多くの研究が見られた反面、哲学的な研究は皆無だった。今後のセラピューティックレクリエーションの本質的研究の発展が、同時にスタッフの資質向上やセラピューティックレクリエーションの啓蒙につながる。(pp.183-189)
21. Recreation in Japan	共	1982年07月	Illinois Parks and Recreation	GNP第2位の経済大国となった日本において、非常に遅れた分野がレクリエーションである。その概念は、歌・ゲーム等の種目中心・異国文化模倣型で、現在でも人間の余暇欲求の評価や開発という方向性が見られない。障害者の余暇問題についても暗中模索の段階である。独自の全人的余暇能力開発への道を開拓することが、1980年代の課題である。Cleary E. L. Jr.、茅野宏明(共同研究につき担当部分抽出不可能:pp.26-29)
<b>その他</b>				
<b>1. 学会ゲストスピーカー</b>				
1. のじぎく兵庫国体・兵庫大会を終えて	単	2006年12月9日	兵庫体育・スポーツ科学学会、2006年度秋季シンポジウム	「のじぎく兵庫大会」には、学生ボランティアの募集・養成・派遣・振り返りを実施した。実践的な体験には、学生の大きな成長も見られた。その報告をし、今後の学生ボランティアの維持と障害者スポーツとの連携の必要性を解説した。
<b>2. 学会発表</b>				
1. 退所目前に実施した個別レクリエーション支援	共	2015年11月12日	身体障害者リハビリテーション研究集会2015	本研究の目的は、高次脳機能障害支援において、退所を目前にした利用者へ実施した支援の成果と課題を明らかにすることである。①利用者による到達目標の達成を促進；②退所後のシミュレーションによる自己評価力を促進；③訓練目標達成と同時に余暇活動の具体化促進；④余暇の大半を寝て過ごすことがなくなった、4点の成果が見られた。今後、エビデンスベース研究の導入や退所が目前でない利用者への支援策の検討が必要である。
2. 高次脳機能障害支援におけるレクリエーション的個別支援の質的効果に関する一考察	単	2013年3月10日	日本リハビリテーション連携科学学会 第14回大会 ちば	高次脳機能障害支援事業施設において、OT・SW・TRSが連携して実施したレクリエーション的個別支援の2事例を報告。個々の興味や関心に沿い、利用者のペースに合わせて実施。失敗経験の多い利用者は、発動性や対人関係づくりに建設的な変化を示した。
3. 高次脳機能障害への連携的アプローチの試み	単	2011年3月13日	日本リハビリテーション連携科学学会 第12回大会in滋賀	3事例の途中経過を報告。連携的アプローチの基本モデルは、プロセス指向型・移行重視型・ゴール指向型を採用。失語症には写真撮影の課題、興味関心を引き出す質問紙などを使用し、楽しいことや集中できる活動など今後の方向性を考察する基盤ができた。
4. 授業に地域連携を組み込んだ試み	単	2010年06月06日	平成22年度全国研究集会 日本レクリエーション協会公認指導者養成課程認定校研究連絡会議	知的障害者施設と教育的に連携し、学生がレクリエーション活動の企画と運営に携わり、利用者を大学に招く交流会を実施。考え抜く、行動する、協働するという社会人基礎力の基盤を固めることにつながると期待される。また、学生は実践力の向上に役立つと述べる。
5. レクリエーション教育における授業効果	共	2009年11月29日	日本レジャー・レクリエーション学会 第39回学会大会	レクリエーション教育のカリキュラムに、宿泊型教育プログラムを展開している。その成果の持続性を明らかにすることを目的とした。宿泊型教育プログラム終了直後と3ヶ月後に調査を実施。最善策の検討・話しやすい環境づくり・ルールを守る、に統計的に向上した有意差が見られた。茅野宏明、長岡雅美、松尾純子
6. アリゾナ州におけるTherapeutic Recreation視察報告	共	2008年11月30日	日本レジャー・レクリエーション学会第38回学会大会	アリゾナ州でのTRの現状と課題とその動向分析をし、日本におけるレクリエーションプログラムで、より専門的なサービスを提供するための課題と解決策のキーを検討した。森美和子、茅野宏明
7. レクリエーション教育における実践的展開の報告	共	2008年11月30日	日本レジャー・レクリエーション学会第38回学会大会	武庫川女子大学及び同短期大学部で過去20数年にわたり、レクリエーション関連資格のための教育プログラムの一環として、講義・実技演習科目以外に、宿泊型教育プログラムも展開している。実践力と生活力の両面を研修する場面の報告と今後の課題について発表した。茅野宏明、長岡雅美、吉田圭一
8. レジャー・アセスメントと施策構築に関する基礎的研究	共	2008年11月30日	日本レジャー・レクリエーション学会第38回学会大会	余暇生活診断テスト(日本語版)をきっかけとして、各種の尺度に関する検証が行われた。今回は、レクリエーション志向性尺度として、今後のレジャー・アセスメントの構築を検討した。土屋薫、茅野宏明、マーレー寛子、佐橋由美、佐藤馨
9. 自立生活訓練における余暇教育プログラムの現状	単	2007年03月18日	日本リハビリテーション連携科学学会 第8回大会	10年間の余暇教育プログラムの変遷から現在の課題と今後の展開について考察。「やればできる」体験が実現可能な目標の設定、利用者とのコミュニケ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
10. 障害者スポーツセンターにおける知的障害児の余暇支援の報告	共	2006年12月3日	日本レジャー・レクリエーション学会第36回学会大会	レジャーを重要視、再オリエンテーションの実施などを今後の展開に盛り込む予定。 知的障害児にとって重要な支援項目の一つである余暇支援の現状と課題を、事例分析した。わかりやすい技術取得の教授法などが、対象者のニーズに添う必要がある。明確な目標設定が可能な支援方法が求められている。永井由美子, 茅野宏明
11. 障害者とレクリエーション	共	2006年12月3日	日本レジャー・レクリエーション学会第36回学会大会	肢体不自由者に対する余暇教育プログラムに参加した事例を通して、利用者が希望する余暇活動への取り組みにおける現状と今後の課題を考察した。明確な目標設定が必要になり、スモールステップの実施が望まれる。竹園恵, 出原由美, 茅野宏明
12. 楽しむって何?セラピューティックレクリエーション	共	2005年12月1日	日本レジャー・レクリエーション学会第35回学会大会	セラピューティックレクリエーションという言葉が福祉現場に入ってきて久しい。そこで、全米セラピューティックレクリエーション学会の許可を得て、日本の現場にできる限り即し、理解しやすいものに作成した。パワーポイントによるスライドも可能。個人への援助目標を達成することを視野に、意図的にレクリエーション活動援助を提供することに重視したい。マーレー寛子, 茅野宏明, 岸田圭代, 田島栄文
13. 個別プログラムとケースワークの実践	単	2004年12月4日	日本レジャー・レクリエーション学会第34回学会大会	余暇教育プログラムやその他の個別プログラムとを比較しながら、個別プログラムにおける成功事例と成功に至らなかった事例について、参加者からの指摘を受けながら、理想的な援助を考察したワークショップ。
14. セラピューティックレクリエーション・サービスモデル (AGLモデル) の適応性	単	2003年11月9日	日本レジャー・レクリエーション学会第33回学会大会	1978年にセラピューティックレクリエーションサービスモデルとして、レジャーアビリティモデルが発表された。日本文化においてこのサービスモデル以外に、1998年に発表されたアリストテレスのグッドライフ (AGL) モデルの適合性を検証した。理論モデル段階なので、実践での実用性についてフィールドにて実証する必要がある。
15. 個別援助技術を促進するセラピューティックレクリエーション・サービス	単	2003年10月	日本社会福祉学会 第51回全国大会	レクリエーション活動援助は一般に集団援助として行われることが多い一方、個別援助 (例えば、趣味発見等) も含まれる。現在、行われている余暇教育プログラムは、「自己決断と楽しさ向上モデル」に合致する体系で進められている。3ケースを分析した結果、各ケースでの援助過程は、セラピューティックレクリエーションサービスでありながら、ケースワーク (個別援助) 過程のポイントを用いていることがわかった。
16. 老人ホームにおけるセラピューティックレクリエーションサービスの整備に関する一考察	単	2002年11月24日	日本レジャー・レクリエーション学会第32回学会大会	一施設で行われている既存のレクリエーションプログラムをセラピューティックレクリエーションサービスモデルに照らし合わせて、種々のプログラムの連続性を検証した。セラピューティックレクリエーションサービスへの質的向上を目指すには、プログラムの量 (種類の豊富さ) よりも、質 (意図した連続性) の確保が重要である。
17. 余暇教育プログラムの5年間	単	2002年10月	日本社会福祉学会 第50回全国大会	週1回A県内のB十度身体障害者更生援護施設で行っている余暇教育プログラムの5年間の軌跡をまとめた。①障害の重度化、②利用者スタッフの比率、③プログラムの参加条件、④スタッフの技能、⑤プログラムの再開発という5点に変化が見られた。特に④と⑤については、今後の課題として、早速に対処する必要がある。
18. セラピューティックレクリエーションサービスモデルの実践に関する研究 (1) - A Pシートの試案 -	単	2001年12月2日	日本レジャー・レクリエーション学会第31回学会大会	余暇活用能力モデルを基に、老人病院で使用するのに必要なA Pシートを試案した。セラピューティックレクリエーションプログラムデザインのシステム論に基づいたシートは、一方でナッシュの階層説を取り入れ二元的見地から、利用者のアセスメントを可能にした。今後はC T R S とともに、A Pシートの実用化に向けて、シートのさらなる改良に着手していく。
19. An Application and Effects of the Leisure Education Program in Japanese on Independence in Leisure Among the Clients in the Independent Living Training Center	単	2000年09月	American Therapeutic Recreation Association - 2000 Annual Conference in Cincinnati	社会復帰のためのプログラムである余暇教育プログラムの日本における適応法と成果について発表。オリジナルプログラムに余暇生活診断テストのスケールを加えたり、プログラム実施前後には①内的余暇動機スケールと②余暇退屈度スケールの実施を導入したりした結果、成果が出ていると報告。しかし、ケース数は30に満たないため、これからも継続的にプログラムを継続していく予定である。
20. 余暇教育プログラム参加者の余暇意識の変化	単	1999年12月5日	日本レジャー・レクリエーション学会 第29回学会大会	余暇教育プログラムの概念と実際のプログラムユニットを紹介。そして、週一回のプログラムの実践から余暇意識への変化を報告。PretestとPosttestの導入により、プログラムの効果を見ることができ。しかし、自立訓練の中で効果的なプログラムの一つとして考えるには、継続的な研究が行われる必要が



研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
21. 余暇教育プログラムが自意識に及ぼす影響	単	1999年10月	日本社会福祉学会 第4 7回全国大会	ある。 自立生活訓練センターで行われている余暇教育プログラムの参加者は、自らで決定した余暇活動の実現をめざしてプログラムに励んでいる。そこで、プログラム参加者の自意識への変化について本人の考えをまとめてみた。結果、考える視野が拡大した、自己選択の受容、自己責任の受容、そして実行力の習得、という4点において自意識に影響を及ぼす可能性があるといえる。
22. 夢の実現に向けて	共	1999年10月	第3回全国リハビリテーション医療研究大会（神戸）	既に自立生活訓練として行われている余暇教育プログラムに体験ユニットを導入した。自らが選んだ余暇活動を自らで体験するまでには、様々な阻害要因を自らで解決する必要がある。そのための努力を惜しまずに果敢に挑む気持ちを行動に表すことの重要性を学習することが可能である。これが自立生活全般への行動変容につながると考えられる。茅野宏明, 北井恵子, 茅野真美
23. 余暇教育プログラムによる余暇意識の傾向	単	1998年10月	日本社会福祉学会 第4 6回全国大会	自立生活訓練の一環として余暇教育プログラムが行なわれている。本研究は、このプログラムにより余暇意識がどのように変化したのかを明らかにすることを目的とした。退所予定者に限定すると余暇意識の中に自発性や退屈度に変化が表われる。自発性は高まり、退屈度は低くなる傾向を見ることができた。今後とも継続したプログラムの成果を見守る必要があると考えられる。
24. 余暇生活設計のためのツール開発に関する研究	共	1997年11月1 6日	日本レジャー・レクリエーション学会第27回 学会大会	因子分析を通じて、余暇に関する内発的動機づけのアセスメントツールであるILMの日本語版の信頼性と妥当性を検証した。日本語版は原尺度とは違い、多元的な動機づけの分析には適していないが、一元的な解釈としては有効であることが明らかになった。今後、原尺度と同様の余暇認識の細分化を図るには、因子間の区別が明確になるような設問文の発展が必要とされる。野村一路, 茅野宏明, 佐橋由美
25. 余暇教育プログラムの試み	単	1997年10月2 6日	日本社会福祉学会 第4 5回全国大会	平成9年度文部省科学研究費助成研究の一部として行われた。医学的治療や訓練を受けながら、自由時間の過ごし方などについて学習する機会を設けることによってQOLを目指す試みを、余暇教育プログラムに基づいて実施した。プログラムはワークシート形式で行われ、参加者の内発的余暇動機を醸し出すことに重点をおく。そして、プログラム前後の余暇行動の変化を質的・量的に考察する。
26. 福祉レクリエーション援助に有効な余暇アセスメントに関する一考察	共	1997年09月2 1日	'97福祉レクリエーションフォーラム in 横浜 ラポール	福祉レクリエーション援助のインテークとして重要な余暇アセスメントの有効性を検証した。余暇アセスメントとして内的余暇動機スケールや余暇退屈度スケールを用い、平均値と各自の値とを比較した。余暇退屈度スケール値を基に並べ替えると、ケースワークにおける自立的な生活面での評価を合致する傾向が見られた。福祉レクリエーション援助に活用できる余暇アセスメントではあるが、ケースワークとの併用が不可欠である。茅野宏明, 池幸美, 土田耕司
27. 余暇教育プログラム (LEP) の可能性について	単	1996年10月1 2日	日本社会福祉学会 第4 4回全国大会	身体的障害を受傷した多くの身体障害者は医学的治療や訓練を受け、障害を受容する過程を経て、社会復帰のための職業訓練を受ける。ところが、自由時間に関する訓練や学習はあまり重視されていない。LEPのもつ柔軟性を生かすことによって、異文化圏における余暇教育の成果を比べることができるとも思えない。今回は、邦訳版によるLEPの効果を、健常学生に対して実施した結果からみることができた。
28. 老人医療・保健・福祉・教育領域におけるレクリエーション・ワークの理論的依拠その④	共	1992年10月1 8日	日本社会福祉学会 第4 0回全国大会	第39回大会で使用したレクリエーション認識シートを改善し、標本数を増やして調査研究を行った。レクリエーション活動は従来から人間交流に重点を置いていわれているが、それを支持する結果は得られなかった。気分転換になっても、他者とのトラブル緩和にはつながらない。領域間の違いからは、老人保健施設における個人のレクリエーション活動の開発の重要性を見ることができた。個人の余暇生活開発を重視したセラピューティック・レクリエーション・サービスの導入も検討される必要を示唆する。茅野宏明, 千葉和夫
29. 重度障害者を対象としたかかわり方に関する一考察	単	1991年11月1 0日	第21回日本レクリエーション学会大会	個々の余暇生活を援助する方法と資格が確立しつつある今日、自己決定が困難と思われる人々に対しても余暇生活面での自立を促進することが重要である。重症心身障害者とかかわっている指導員の態度能力を分析した結果、代行決定の継続過程を発見できた。また、その過程を充実するには、指導員自らの情報や知識を入手することが必要である。
30. 老人医療・保健・福祉・教育領域	共	1991年10月2	日本社会福祉学会 第3	老人関連4領域の、特に医療と福祉の領域における

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>2. 学会発表</b>				
におけるレクリエーション・ワークの理論的依拠その③		0日	9回全国大会	スタッフのレクリエーションに対する認識をレクリエーション認識調査シートによって分析した。老人福祉施設スタッフが老人病院スタッフよりもレクリエーションへの認識を強く持っていることがわかった。また、老人福祉施設が従来の収容型志向から生活型志向へとその方向性を変化しつつあることがわかり、レクリエーション専門職の配置により、さらに活性化した生活を送ることができるであろう。千葉和夫、茅野宏明
31. 対人関係能力の高揚に効果的なプログラムに関する一考察	単	1990年08月	障害者体育・スポーツ研究会第14回大会	自己実現・人間交流の成功率を高めるために、スポーツを手段として取り入れた意図的な指導計画を試みた。技能や競技力向上をねらいとした指導計画ではない。ピーターソン-ガンの提唱する目標設定をもとにした行動目標は、指導者のリーダーシップ能力の向上に有効であるとともに、メンバー個々の自主性を養うことにも有効であると思われる。
<b>3. 総説</b>				
<b>4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績</b>				
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
1. 遊びやスポーツのルールにおける自立支援の意義	単	2013年10月10日	全国身体障害者総合福祉センター発行、戸山サンライズ、第259号	生活の中のいろいろな遊びが自立支援にどのように役立っているかを、文化と歴史を振り返りながら解説した。遊びに「友人との交流」を求めている人が約40%いるという調査結果もあり、遊びは人間の自発性・創造性・社会性の向上に役立っている。
2. 個別支援の実践から学ぶレクリエーション援助モデル	単	2011年10月1日	福祉レク実践報告会（大阪府レクリエーション課程認定校協議会）	アメリカで発展したセラピューティックレクリエーションサービスモデルを軸に、日本における高次脳機能障害支援の実践から、援助モデルを発表した。
3. 「障害者支援における余暇活動の意義」	単	2010年9月9日	平成22年度大阪市淀川区地域自立支援協議会第2回研修会	障害者支援における余暇活動の意義について発表。ナッシュの余暇活動の活用ランクを用いて、現状の支援の分析を強調した。
4. 授業に地域連携を組み込んだ試み	単	2010年6月6日	日本レクリエーション協会公認指導者養成課程認定校研究連絡会議 平成22年度全国研究集会・総会 実践・研究発表	レクリエーションプログラムの企画と運営を指導するにあたり、学生同士での模倣的な企画では限界がある。近隣の知的障がい者施設と連携し、学生が企画したレクリエーションプログラムに利用者が参加するという授業形態に取り組み、得られた効果などを発表した。
5. 社会人基礎力の涵養をめざす教育の構築	共	2010年3月31日	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科、同短期大学部人間関係学科 平成21年度特別経費事業報告書	平成21年度（2年目）特別経費事業を実施した。レクリエーション領域での実践的授業展開を報告した。実践的な授業展開は学習成果を示した。茅野宏明、長岡雅美
6. セラピューティックレクリエーション	単	2009年9月17日	兵庫県作業療法士会第2回神戸ブロック研修会	セラピューティックレクリエーションの定義とそのサービスモデルの解説をし、特に作業療法とセラピューティックレクリエーションサービスの接点や相違点などをスライドを用いて示した。
7. 社会人基礎力の涵養をめざす教育の構築	共	2009年3月31日	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科、同短期大学部人間関係学科 平成20年度特別経費事業報告書	平成20年度（初年度）特別経費事業を実施した。レクリエーション領域での実践的授業展開を報告した。茅野宏明、長岡雅美
8. 障害者を支えるレクリエーション環境づくり	単	2007年9月1日～	日本レクリエーション協会発行、良質生活	障害者を支えるレクリエーション環境づくりとして（1）法律による影響、（2）兵庫県内の取り組み、（3）有効な社会資源の活用、（4）今後の課題とその方策、という4回に分けて分析し、解説した。
9. 身体障害者への余暇支援をめぐる今日的課題	単	2007年12月10日	全国身体障害者総合福祉センター発行、戸山サンライズ、第236号	自活訓練と余暇支援の現状を解説し、余暇教育プログラムの実践報告を通じて、余暇支援の要を解説した。要は、ピアアドバイザーと学生ボランティア、そしてネットワーク拠点との連携があげられた。
10. セラピューティックレクリエーション（TR）とそのサービスについて、月刊総合ケアに3回にわたり、紹介した。	単	2001年	月刊ケア	セラピューティックレクリエーションとそのサービスについて、介護福祉士やホームヘルパーにわかりやすく、3回に分けて解説した。
11. レクリエーションの七不思議	単	1997年3月11日	人間学研究 第13号	何で大学でレクを学ぶ？疑問に応えるために、学生用に解説した。レジャー、余暇、レクリエーションとレクリエーション、レジャー活動とレクリエーション活動の違い、遊びとレクリエーション活動の違い、レクリエーション活動とレクリエーション実技、学習する人々の職種の広さ、などから疑問を解明。
12. 高齢者とレクリエーション活動	単	1993年3月10日	人間学研究 第8号、武庫川女子大学人間研究会	学生ボランティアが高齢者に接する時の要点を、先行研究の結果をまとめながら、考察した。対人間としての人間尊厳観を抱きながら会話することから、

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
13. スキーの魅力と未来像	単	1992年3月10日	人間学研究 第7号、武庫川女子大学人間学研究会	高齢者個人の余暇生活の充実を図る意図的な援助法の開発を紹介。 スキーの魅力のカイヨワの遊びの分類、速度のコントロール、雪の神秘性、非日常性などの視点から分析しながら、現代人のスキーと自然の調和という誤解を導き出した。スキー場のオフの姿の悲惨さを紹介し、未来を解説。
14. 身体障害者冬季スポーツ国際クラス分けマニュアル	共	1992年	日本身体障害者スポーツ協会	国際レベルのクラス分けを邦訳して、広く障害者スポーツ指導者に啓発するマニュアルを作成。大久保, 桂, 高田, 茅野, 土田, 飛松, 高橋
15. 日本レクリエーション・アカデミー通信教育課程教材 No. 5 実践理論	共	1991年10月	日本レクリエーション協会 教育センター	余暇処方に行われている現場に関する歴史や対象者が抱く問題点や余暇欲求について、主目標や副目標の設定、プログラムの内容検討という側面から、余暇処方を解説。また、活動分析も取り入れた。(分担: pp.91-96)
16. ボランティア考 人間学研究会 (5)、武庫川女子大学人間学研究会	単	1990年3月3日	人間学研究 第5号	ボランティアする側と受け入れ側との双方にある問題点が、ボランティア活動の発展を妨げている。ボランティアの原点である「熱意を持って行うこと」についての再考を提案。ボランティアが自他ともに自尊心を確立し、自己実現に向かって歩んでいけるようにすることが大切。
17. 社会的適応の体験 人間学研究会 (4)、武庫川女子大学人間学研究会	単	1989年3月3日	人間学研究 第4号	海外旅行と留学の違いから、異国生活でのさまざまな適応方法を提案。言語への適応は、表現力への適応を養う。外国語を話すと言うことは、その国の文化や生活習慣に従った行動をすることを意味すると理解する必要性を解説した。
18. 余暇処方支援その②	単	1988年8月	レクリエーション、(34) 日本レクリエーション協会	余暇処方型では、実際に個人へ適切なレクリエーション活動を処方するのではなく、レクリエーション活動の特性を余暇生活不全の回復に役立てることである。そのために、的確な原因究明と適切なレクリエーション活動の選択が重要となる。(pp.42-43)
19. レジャー	単	1988年8月	障害者の福祉、(85)、日本障害者リハビリテーション協会	障害者のレジャー活動と言うものはない。レジャー活動は本来自分で見つけていくものである。そのために、自分がどうやって時間を過ごしているかを確実に認識することである。次に、苦痛になる行為を究明することである。そして、自分だけの空間を持つことによって、創造的レジャー活動へとつながるのである。(pp.33-35)
20. 余暇処方支援その①	単	1988年7月	レクリエーション、(33) 日本レクリエーション協会	余暇処方型支援には、成功体験を味わうという目的がある。そのために、個人の余暇欲求を明確にし、その欲求に向けてプログラムを計画する必要がある。しかし、基本的に個人を中心にプログラムを考えながら、時には小グループを編成してのプログラムを通じて、個人の行動変容を促す必要がある。個人プログラムとグループプログラムは独立しているが、相互作用が存在する。(pp.42-43)
21. レクリエーション活動の分析方法	単	1988年5月	戸山サンライズ情報、(35) 日本障害者リハビリテーション協会	レクリエーション・ワーカーは行動目標を達成するために、適切な活動を選択するが、この過程で不可欠なことはその活動を分析することである。活動分析により、その活動の持つ要素を調べ上げ、目標達成への有効性を検討する能力が求められている。(p.9-11)
22. プログラムの目的と目標の設定	単	1988年4月	戸山サンライズ情報、(34) 日本障害者リハビリテーション協会	対象者を十分に理解した上で、対象者の行動変容をねらいとした目標の設定が重要になってくる。対象者の余暇生活行動の自立に向けた目標を考えることが重要である。対象者の目標は個々に異なり、また具体的な目標を設定する必要がある。(pp.19-21)
23. 三色パンの願い	単	1988年3月3日	人間学研究 第3号、武庫川女子大学人間学研究会	世界の人種を、白人系、黒人系、黄色系に分けた時、人種間や民族間、あるいは宗教間での争いごとが絶えない世の中を、三色パンに例えた。どれが欠けても商品にならず、いろいろな味覚を楽しめることが特徴とし、互いに特徴を主張しながらも、相互に過干渉とならず、互いの存在を認める平和社会を望んでいる。(pp.53-57)
24. レクリエーション・ワーカーの資質	単	1988年3月	戸山サンライズ情報、(33) 日本障害者リハビリテーション協会	レクリエーション・ワーカーの資質として大切な点は、対象者を理解することである。そのために、個人の余暇生活行動の目標への達成度をみる個人評価と同じ目標をもつ個人からなる集団としての目標への達成度をみるグループ評価がある。(pp.19-21)
25. 日本におけるセラピューティックレクリエーションの現状		1987年7月10日	総合リハビリテーション、15 (7)、医学書院	日本におけるセラピューティックレクリエーションのサービスや資格保持者、福祉レクリエーションとの相違点と類似点などを解説した。(p.565)
26. セラピューティック・レクの目的は総合的余暇能力開発	共	1983年5月	レクリエーション (271)、日本レクリエーション協会	全米セラピューティック・レクリエーション協会がサービスについての公式見解を発表した。一個人のもつ余暇欲求の段階に合わせてセラピー・レジャー教育・社会参加というサービスを提供し、総合的余暇能力開発

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
<b>5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等</b>				
				暇能力を開発していくことがそのねらいである。その点で、セラピューティック・レクリエーションは障害者や余暇能力が劣っている人々のために、非常に有効なサービスであることを翻訳した。(共同研究につき担当部分抽出不可能：pp. 56-57)
<b>6. 研究費の取得状況</b>				
1. 身体障害者向け余暇教育プログラムの有効性の検証	単	1996年4月～ 2年間	平成8～9年度科学研究費(萌芽的研究)	アメリカで開発された余暇教育プログラムを日本文化での有効性を検証する。測定尺度としては、質問紙によるものを採用した。また、余暇情報を提供するために、種々の情報を収集し、閲覧できる環境を整えた。身体障害者を対象に実施した。
2. 身体障害者医療・保健・福祉・教育領域におけるレクリエーションの認識に関する一考察	単	1992年4月～ 1年間	平成4年度科学研究費補助金：奨励研究(A)の萌芽的研究	身体障害者の自立にはADLからQOLとその本質が変わりつつある。QOLを目指すには、余暇生活の質的向上が避けては通れない。身体障害者施設で働く職員が、余暇生活にどの程度認識しているのかを調査し、QOLへの基盤情報を収集した。

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2014年4月～現在	「チャレンジプログラム」を総合リハビリテーションセンター、自立生活訓練センターにて実施。高次脳機能障害の利用者を対象に、実行力を獲得して地域生活力を高める個別支援をOTとSWとの連携で実施。
2. 2012年4月1日～現在	阪神南地域ビジョン委員会委員
3. 2010年4月から2014年3月	「社会復帰プログラム」を総合リハビリテーションセンター、自立生活訓練センターにて実施。高次脳機能障害の利用者を対象に、実行力を獲得して地域生活力を高める個別支援をOTとSWとの連携で実施。
4. 2006年4月から2010年3月	「余暇教育プログラム」を兵庫県立総合リハビリテーションセンター、自立生活訓練センターにて実施。高次脳機能障害の利用者を対象に、実行力を獲得して地域生活力を高める個別支援をOTとSWとの連携で実施。
5. 2005年11月～現在	日本リハビリテーション連携科学学会
6. 1996年6月から2006年3月	重度身体障害者更正援護施設における余暇教育プログラムの実施
7. 1992年10月～現在	日本社会福祉学会
8. 1987年08月～現在	日本障害者体育・スポーツ研究会
9. 1987年04月～現在	日本レジャー・レクリエーション学会